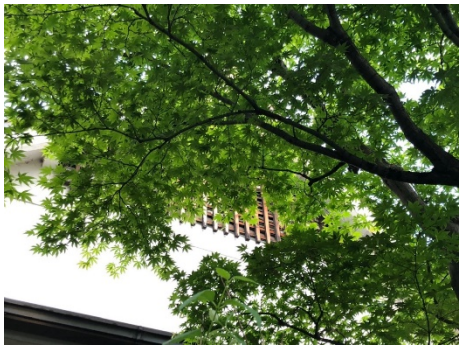
月影

第70号

令和三年六月一日発行
浄土宗西山禅林寺派
常林院

病は医者に
寿命は仏さまに
おまかせする



縁あって
この世に生まれ

縁あって
この世を去る

人生の終わりは
誰にも分からない

ただただ佛縁に
おまかせするのみ

開宗八五〇年 法然上人の生涯

【八】

念仏の道へ

夢の中で

お念仏がすべての人を救う唯一の方法であることを確信した法然上人は、専修念仏（ただひたすら念仏を称えること）の道を歩み始めます。

この時期、法然上人は、次のような宗教体験をします。

〝ある夜、不思議な夢を見た。山の麓に大きな河があり、西方を見ると紫の雲がたなびいており、その中に、上半身は墨染、下半身は金色に輝く僧が現れた。

「どなたですか」と聞くと、「私は善導である。あたなが念仏を広めることは尊いことである。そのことを伝えるために現れた」と告げて去っていった。〟

二祖対面図

実際には出会ったことがない善導大師と、夢の中で出会ったことは、法然上人にとって念仏の教えを広めることの正しさを確信できた出来事でした。

京都市中へ

お念仏の教えを人々に説き伝えるため、法然上人は、黒谷を後にして京都市中へ下山します。

まず、京都西山広谷に向かい、遊蓮房円照という僧を訪ねました。

円照は熱心に念仏を実践し、一門から尊敬を受ける僧でした。法然上人は、円照と共に語り合い、念仏の交流を深めました。しかし、その二年後に円照は三十九歳で亡くなります。法然上人は、後に「浄土の法門と円照にあへるこそ、人界に生を受けたる思出にては侍（はべ）れ」と円照の存在の大きさを語っています。

東山吉水へ

円照と死別後、法然上人は東山の吉水の小さな庵へと移ります。その後、生涯において、この吉水の地でお念仏の教えを広めていかれます。

法然上人のもとには徐々にさまざまな人々が集まるようになります。

（つづく）

仏事と作法

葬儀式(二)

枕経

家族が亡くなったとき、初めにすることは、お寺さんに連絡をし、枕経をあげてもらうことです。

故人の枕もとでお経をあげるところから、枕経(まくらぎょう)といいます。

枕経の意義

枕経は、当人に代わって懺悔(諸々の罪を悔い改める)をし、剃度式(おかみそりの儀式)、そして授戒をして、故人を仏の弟子にします。その証として戒名を授与します。

また、命終の時はお念仏によって阿弥陀様がお迎えに来られ、お浄土に往生することを故人に説き聞かせ、死の苦しみを除き、安心を与えるのです。

だから、亡くなった後、できる限り速く枕経を勤める必要があります。

剃度式

剃度式は「おかみそり」とも言われます。

この儀式は、仏の弟子になるため、髪を剃って出家をする、枕経での重要な儀式です。

剃刀を頭に当て、お経を称えながら、頭を三度、(右、真ん中、左)に分けて髪を剃ります。剃るといっても、実際は刃のない剃刀で剃るまねをするのです。

剃刀(かみそり)

生前に、五重相伝会や授戒会を受けておられる方は、すでに剃度式をされているので省略します。

臨終行儀

現在、亡くなる場所は自宅ではなく、そのほとんどが病院です。昔は自宅で命が尽きようとする病人に対して、僧侶を呼び、お浄土へ安らかに旅立てるように、臨終行儀を行っていました。作法に則って、僧侶はお念仏を称え、家族は病人の世話をし、皆で最後を看取っていたのです。

現代では、亡くなってから僧侶が呼ばれます。お念仏によってお浄土へ往生することを説き伝える枕経は、現代の臨終行儀ともいえます。

(つづく)

仏教歳時記

叩(たた)かれて昼の蚊(か)を吐(は)く木魚(もくぎょ)かな

夏目漱石

木魚の中にいた蚊が、木魚を叩く音に驚き飛び出す様子を詠んだ句です。

木魚はお経を読むときにリズムを整える仏具です。浄土宗や禅宗、天台宗で使われています。

浄土宗ではお念仏を称える時、お念仏を邪魔しないように裏打ちで木魚を叩きます。

木魚に魚の鱗(うろこ)が彫られているのは、眠るときも目を閉じない魚の勤勉さにあやかろうとしたからだそうです。

雑記抄　～供に養う～

供養には、目に見える供養と見えない供養があります。見えない供養の一つに「心の供養」があります。『思い出す』ことも心の供養の一つです▽元ＮＨＫアナウンサーで作家の下重暁子(しもじゅうあきこ)さんが著書の中でこんなことを書いておられます。『私は亡くなった人のことを時々思い出し、話題にするようにしています。その時、死者はよみがえり、生前の形を取って生き返るのです。体は死んでいても魂は生きていて、ふっと生きている者の前に姿を現すことがあるのです。思い出すということは、死者をよみがえらす作業です』▽亡き人を心に想うとき、姿なき姿が見え、声なき声が聴こえる。そう感じるときがあります。その人を想うことが心の支えになり、心の癒(いや)しになる。私たちにとって『思い出す』ことは、とても大切な作業なのです▽「供(とも)に養う」と書いて『供養』。亡き人と私、供養する者と供養される者が、供養を通して、供(とも)に今よりも良い状態になっていく。供養という言葉には、そんな意味が込められているような気がします▽亡き人のことを「伝えていく」。そして、「忘れない」。これも心の供養です。